

「強み」と「弱み」

「誰でも自分の強みについてはよくわかっていると思っている。だが、たいていは間違っている。わかっているのはせいぜい弱みである。それさえ間違っていることが多い。しかし、何ごとかを成し遂げるのは、強みによってである。弱みによって何かを行うことはできない。できないことによって何かを行うことなど、とうていできない。」

(P.F.ドラッカー)

私自身がそうであるのだが、人は他者の良さよりも、至らなさ、欠点、気に入らない所がよく見える。時に人のよい所や優れている所を発見しても、素直にそれを認めることができず、嫉妬に似た、自己嫌悪を含む羨望になってしまう。「あの人はいいよな。俺なんか・・・」である。

ドラッカーの言うように、自分の「強み」をきちんと把握できる人は、何かを成せる人である。しかし、自分のことは自分でもよくわからないことが多く、他者に言ってもらって自覚することも多い。そして、何かを成し遂げるのは、強みによってである。子どもたちに、その子なりの強みを自覚してもらうには、大人が良さを見る、という目で見えていなくてはならない。

ここまでの話には多くの方が同意してくれると思う。同意までいなくても100%否定されることはないのではないか。それなのに、なぜ学校の減点主義の文化は変わらないのであろうか。良さや伸びる可能性だけに目を向けて、その子の教育に当たることはできなのだろうか。できないことをできるようにする、という固定的な考え方から脱却することはできないのか。

子どもたちのできること、よい点、強みを探すこと、それのみに注目していれば、「できない子」や「だめな子」はいなくなるのではないだろうか。